



Title	13. 「北大版ピア・サポート」の可能性を探索する事業実践の取り組み：全学教育フレッシュマンセミナー「学生支援におけるピア・サポートを考える」授業実践から第2報
Author(s)	松田, 康子
Description	第3部: ピア・サポート活動の考察
Relation	北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成23年度版）p. 141-151
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49512
Type	report
File Information	14.matsuda.pdf



13. 「北大版ピア・サポート」の可能性を探索する授業実践の取り組み

全学教育フレッシュマンセミナー「学生支援におけるピア・サポートを考える」 授業実践から第2報

松田康子¹

1. はじめに

本稿は、昨年度の報告書において報告させていただいた授業実践の第2報である。

授業開講において、昨年度との大きな違いは、受講生全員にとってピア・サポート室の存在が既知であるところからスタートしたことである。多くの学生が入学した時からピア・サポート室の存在に気づき、幾人かの学生は利用した経験も持って受講に臨んでいた。それゆえ、おのずと、最終的な考察も、より現在の活動状況を踏まえたうえで、ピア・サポートの役割機能に踏み込んだものへと深まった印象をもっている。最終レポートにみる成果として、昨年度は、全く無の状態から作り上げてきた発展途上のピア・サポート室の活動状況からの考察であったが、今年度は実体が顕になり、学生がそれを受けとめながら、咀嚼した考察が記されていた。

本報告では、昨年度との違いを意識しつつ授業展開の結果を記し、他大学はサポーター事前研修として授業を位置付ける場合があるなかで、本授業がピア・サポート活動へ果たす役割について考察することとしたい。

2. 2011年度授業の構想

授業の最終目標は、昨年度同様、ピア・サポート室の果たすべき役割機能について提案することにおいた。昨年度との違いは、調査を1つに絞り、学生支援組織職員からの聴きとり調査のみとしたことである。最初にブレインストーミングを行った後、まず調査資料から学生の支援ニーズの推論を行い、学生支援における課題を整理したうえで、実際の学生支援組織の資料調査を行い、本調査として聴きとり調査を実施した。最後に、調査報告の考察において、ピア・サポートこそその役割機能について発表をし、意見交換を行い、個人レポートを作成させた。

枠組みは昨年度同様に、後期開講、演習形式で定員23名。主な履修者は1年生。全学部学生が履修可能な一般教育演習という科目である。昨年度は、有志でピア・サポーターが参加したが、今年度は正式にピア・サポート代表がTAとして参加する形をとった。

3. 授業の展開

3.1 初回オリエンテーション

初回オリエンテーション時、授業の構想とピア・サポート活動の概略を受講希望者に示した。オリエンテーションに使用した資料の一部を図1に示す。

¹ 北海道大学教育学研究院 准教授

ピア・サポート活動の概略を示す際、ピア・サポートのタイプとして、早坂（2010）が挙げた相談室型、修学支援型、新入生支援型に加えて、ネットワーク構築支援型、リーダーシップ育成型を本学および他大学の実践を挙げながら提示した。受講希望者に北大ピア・サポート室を知っているか尋ねると、履修希望者全員が挙手したのは昨年との大きな違いであり、認知度向上活動は着実に実を結んでいることを実感した。

学生支援における ピア・サポートを考える フレッシュマンセミナー担当教員 松田康子（教育学研究院）	授業計画 シラバスからの変更があります																								
学生支援における ピア・サポートを考える - 授業の目標 - 学生支援の充実に向けた提言をしてゆこう - 当事者である学生だからこそ、考えられることをまとめていこう - 当事者である学生だからこそ、できることをまとめていこう（ピア・サポート活動の検討）	学生支援における ピア・サポートを考える - 到達目標 - 調査資料を読み活用することができる - 学内サポート資源を知る - 調査法の習得（聴きとり調査） - ユーザーの視点で学生支援とピア・サポートについて建設的に考えることができる - 調査報告書の作成																								
学生支援における ピア・サポートを考える 授業計画 <table border="0"> <tr> <td>10/6</td> <td>学生の支援ニーズと支援組織を考える</td> </tr> <tr> <td>10/13</td> <td>調査から学生の支援ニーズを探る①（北大生調査）</td> </tr> <tr> <td>10/20</td> <td>調査から学生の支援ニーズを探る②（IR調査）</td> </tr> <tr> <td>10/27</td> <td>学内の学生支援組織を調べる</td> </tr> <tr> <td>11/10*</td> <td>学内の学生支援組織の検討、まとめ</td> </tr> <tr> <td>11/17</td> <td>グループ別発表 ⇒ 個人レポート①（12/1提出期限）</td> </tr> <tr> <td>11/24</td> <td>調査の心得、聴きとり調査計画立案</td> </tr> <tr> <td>12/1*</td> <td>聴きとり調査計画立案、依頼書作成</td> </tr> <tr> <td>12/8</td> <td>聴きとり調査日</td> </tr> <tr> <td>12/15*</td> <td>聴きとり調査日</td> </tr> <tr> <td>12/22*</td> <td>調査のまとめ、発表準備</td> </tr> <tr> <td>1/12-1/26</td> <td>グループ発表と議論 ⇒ 個人レポート②（提出期限）</td> </tr> </table>	10/6	学生の支援ニーズと支援組織を考える	10/13	調査から学生の支援ニーズを探る①（北大生調査）	10/20	調査から学生の支援ニーズを探る②（IR調査）	10/27	学内の学生支援組織を調べる	11/10*	学内の学生支援組織の検討、まとめ	11/17	グループ別発表 ⇒ 個人レポート①（12/1提出期限）	11/24	調査の心得、聴きとり調査計画立案	12/1*	聴きとり調査計画立案、依頼書作成	12/8	聴きとり調査日	12/15*	聴きとり調査日	12/22*	調査のまとめ、発表準備	1/12-1/26	グループ発表と議論 ⇒ 個人レポート②（提出期限）	ピア・サポートとは
10/6	学生の支援ニーズと支援組織を考える																								
10/13	調査から学生の支援ニーズを探る①（北大生調査）																								
10/20	調査から学生の支援ニーズを探る②（IR調査）																								
10/27	学内の学生支援組織を調べる																								
11/10*	学内の学生支援組織の検討、まとめ																								
11/17	グループ別発表 ⇒ 個人レポート①（12/1提出期限）																								
11/24	調査の心得、聴きとり調査計画立案																								
12/1*	聴きとり調査計画立案、依頼書作成																								
12/8	聴きとり調査日																								
12/15*	聴きとり調査日																								
12/22*	調査のまとめ、発表準備																								
1/12-1/26	グループ発表と議論 ⇒ 個人レポート②（提出期限）																								
ピア・サポートとは - ピア（peer） （地位・年齢・能力などが）同等の人 同僚・仲間同士 - ピア・サポートとは（早坂 2010） 「仲間による支援・援助活動」 「訓練を受けるピア・サポーター生徒とサポーターの援助を受ける生徒の両者への教育的効果と、学校全体の援助力の向上を目指した活動」	なぜ、今、ピア・サポートか - 大学の変化 - 廣中レポート（廣中平祐 文部科学省 2000） 「大学における学生生活の充実方策について」 ・「教員中心の大学」から「学生中心の大学」への視点の転換 - 大学における学生相談体制の充実方策について ・「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」 （2007 日本学生支援機構） - 教育の一環としての学生相談 - 社会の変化 「無縁社会」 ・大学でも？ 例）酔っぱらいは一人で帰さない  (図1-1) 学生生活の支援体制																								



図 1 オリエンテーション資料抜粋

3. 2 ブレーンストーミング

今年度のブレーンストーミングは、参加者に思いつく学生の支援ニーズをあれこれ挙げ、それを分類しながら、支援組織を独自に命名し、つくりだす作業を行い発表してもらった。結果を表 1 に示す。

設備整備に関しては、全グループが挙げており、今ある設備をより充実させるニーズとしては、PC、空調、椅子、自販機、学食、生協、図書館、保健センター、課外活動、トレセンが上がっていた。設備の新設希望としては、ロッカー、シャワー室、仮眠室、移動手段としてのバスや地下道などが上がっていた。

ユニークだったのは、3つのグループが「情報提供課」に代表されるような、学習から留学や進路、そして日常生活にかかわる広範な情報提供にかかわるワンストップサービスの支援組織を作り出したことである。ここは、各グループの発表でも力点が置かれていたことを記憶している。情報がばらばらに点在していることの不便さを挙げるもので、背景

には情報過多であるがゆえのニーズともいえるだろう。

このほか、各グループともにユニークな支援組織があげられており、その結果が表の下部部分である。とても身近な学生生活に密着した支援ニーズであり、学生ならではの切実な現実が見えてくるものでもある。学習にかかわる支援ニーズには本年度後期から導入されたICカード出席チェックへの率直な思いがあり、GPAにかかる切ない思いが綴られていた。今年度、スズメバチ被害が生じたこともあり、ハチに関する支援ニーズについては、見過ごせないものといえるだろう。

どれも、学生の戯言と処理されてしまいそうになるが、見落としてはいけない、汲み取られるべき支援ニーズが潜んでいると考えたい。

グループ	1G	2G	3G	4G
支援組織	施設課	施設設備課	施設開発課	機械完備課
		情報課	情報提供課	知らないことほど怖いものはない、公平万歳課
	学習課	学習支援課		
	食堂課			学食の悩みを迅速かつ適切に対処し生徒一人一人の不満をまるでシラミつぶしをするかのように学生を満足させる課
	生活課		切実課	
	サービス課	授業出席課	苦情処理課	何よりもロツ課ー
	交通課			季節でしかくれない課

移動にかかるニーズ	生活にかかるニーズ	学習にかかるニーズ	環境設備に関するニーズ
交通費の支給	リア充になりたい	単位足りない	ハチ怖い(3)
車での通学可	お金	GPAがほしい	騒音
学生用バス(2)	友達がほしい	空きコマがひま	マッサージ機
メインストリートに歩くエスカレーター	夢がほしい	クラスに一人くらい発言してくれる人がほしい	体育用の靴の貸出
自転車の貸し出し	騒げる家がほしい	休み時間を長く、15分はちょっと	
教養等の場所が札幌駅から遠すぎ	5限があるので、バイトできない	代返しづらい	
サークル会館遠い	似てる人多すぎ	授業がつまらない	
冬道講習	夏休み早めに	ICカード出席チェックはいらない(2)	
	料理教室の開講	教科書もっと安く、共同購入に値引きをもっと	

表 1 ブレインストーミング結果

3. 3 学生支援組織聴きとり調査へ

ところで、支援ニーズとは何か。この説明に用いたのが図2に示したスライドである。この「支援ニーズ」という用語を確認したうえで、支援組織聴きとり調査に向け、準備に取り組んだ。具体的には、調査資料分析などを通した先行資料の検討を行い、聴きとり調査に進んでいった。

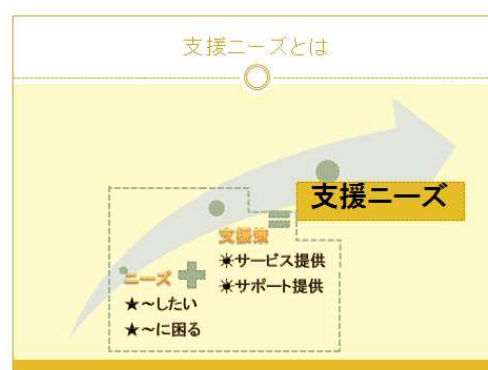


図 2 支援ニーズとは

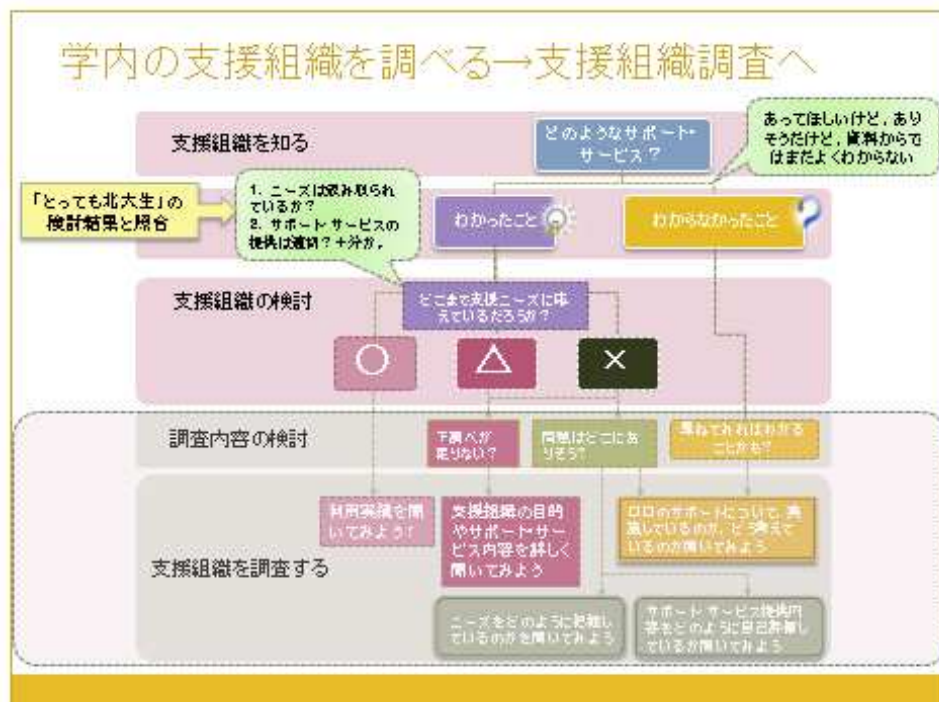


図 3 調査の全体デザイン

調査の全体デザインは図3のスライドで提示した。また、調査目的は図4のスライドに示し伝えた。目的2「ピア・サポートこそが担うことのできる役割とは」、に関しては、考察の段階で、思考の展開を促すために、「支援、支援組織の隙間がどこにあるかを見出し建設的に考えること」を全体に示唆した。

昨年度同様、本稿では調査の詳細は調査報告書に託すことにし、ここでは、最終個人レポートに記された、ピア・サポートの特質と役割機能について、筆者が分析した結果を次節に示し、考察へつなぐ。

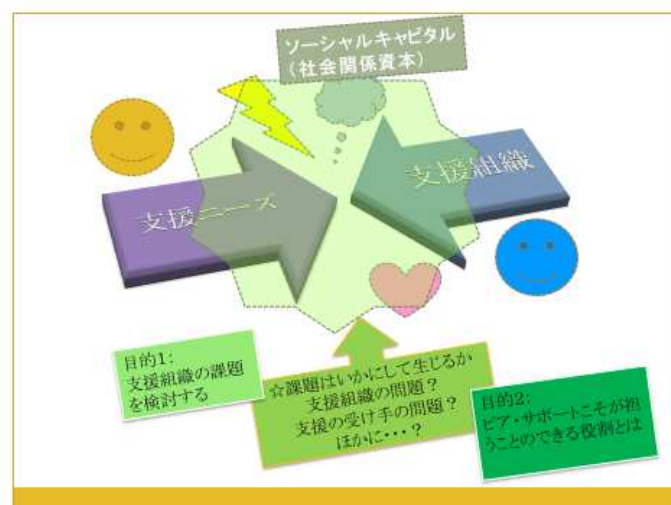


図 4 聴きとり調査目的

4. ピア・サポートの特殊性と役割機能—個人レポートからの分析

2011年度の最終個人レポートには、さまざまなピア・サポートの特殊性についての記述を前提において、ピア・サポートの役割機能が導き出されていた。それは課題そのものが求めていることでもあるが、実際のピア・サポート室の活動を見聞きしている学生の記述であり、かつ昨年度のピア・サポート報告書を参考にして記述されていたことが、今年度の大きな違いである。つまり、幾ばくかのバイアスがあるにせよ、現在のピア・サポート室の活動が、利用者である学生の目にはどのように映っているのか、ということを反映しているものとして受け留めることができる。

表2は、個人レポートに示されていたピア・サポートの特殊性を抽出したものである。

《関係性》のところでは、どれも学内の支援組織の職員との間では成立しえない、または職員では適いつこない、ピア・サポートならではの関係性が挙げられた。また、〈同じ立場だからこそ〉、〈不完全さをもつ同志〉という同質性と、〈経験者だからこそ〉、〈代替性〉という類似性、つまり同じであって同じじゃないという相矛盾するかのような関係が共存していることもここから導かれた。

それは、《場の意味》においても同様で、〈タテの関係〉と〈ヨコの関係〉をともに紡ぐ場として意味づけられていた。〈誰でも立ち寄れる居場所空間〉が成立するためには、同質性をもつ相手のみならず、異質な相手をも抱き込むことが前提としてある。この同じであって同じじゃないという関係性の特殊性の意味については、再度、考察で取り上げることとする。

さらに、《位置づけ》では、支援組織調査を踏まえた結果であるがゆえに、北大版ピア・ピアサポートの特殊性が際立つ部分となった。〈学生のためになにかしたい〉というインセンティブは、他大学の多くのピア・サポートに共通するところであるが、〈対象を限定〉せず、〈役割規定が緩い〉のは、北大版ピア・サポートの特徴といえるだろう。調査に基づいた考察においてこの特徴が導かれた前提にあるのは、北大内の学生支援組織がシステムとしてはおよそ完備されているが、認知度が低かったり、敷居が高かったり、適切な情報にアクセスしにくかったり、といった「隙間」や「ズレ」が生じているという課題が見出されたからである。

また、支援組織間で支援ニーズの重なり合いがある一方で、どちらも引き受けようとししない支援ニーズも存在した。あるグループにおける発表では、利用目的を明確にすることや、対象を限定するということは、同時に適用外という排除を生むことになるという意見が提示された。総合大学の良さとしての多様性が実感され、経験できる場が少ないことを残念に思う意見も提起

関係性	同じ立場だからこそ理解と共感ができる
	経験者だからこそ
	不完全さをもつ同志の双方向な関係性
	代替性(受けてから担い手に)
	フランクな関係
場の意味	新しい関係性
	身近でリアルなモデル
	和やかな空気感
	ヨコの関係を紡ぐ場(類を求め交流を可能にする場)
	タテ(先輩)の関係を紡ぐ場
位置づけ	誰でも立ち寄れる居場所空間
	対象を限定しない
	役割規定が緩い
	学生のために何かしたい

表2 ピア・サポートの特殊性

された。システム化によって生じる課題や閉塞感、弊害をカバーするものとしてのピア・サポートの必然がこうして示されたのである。

レポートの結びの内容に記されたピア・サポートの役割機能は表 3 に示された。

昨年度は、機能として【相談】、【つながりを創りだす】、【能動的機能をもつ】の3つのカテゴリを導き出したが、今回は【つながりを創りだす】、【ニーズを第一線で汲みとる】、【ともに成長する】、【構築する力を育てる】というカテゴリと、それぞれに対して「つなげる」、「つながる」「くみとる」といった機能的側面が見出された。

昨年度と比べるとさらに、【つながりを創りだす】役割機能のバリエーションや表現が広がっており、先に述べた《関係性》や《場の意味》、《位置づけ》にみるピアの特殊性が反映された結果となった。また、隙間やズレに注目することによって、【ニーズを第一線で汲みとる】というピア・サポーターならではの役割機能も導き出され、【ともに成長する】、【構築する力を育てる】というピア・サポーター自身にとっての役割機能を含んだカテゴリが新たに加わったのも、昨年度のレポートには明確に示されていなかった興味深いポイントである。昨年度報告書なども参考にしたうえでのレポートであるので、受講生が見聞きしたピア・サポート活動の反映とするのは、尚早であろうが、これも一つの鏡として省察の機会とし、発展の糧としたい。

		つなげる		つながる	くみとる
		学生と組織	組織と組織	学生と学生	相談
つながりを創りだす	支援組織の補助・入口	○	○	○	
	ネットワーク構築	○	○	○	
	たまご型支援	○		○	
	タテの伝授			○	○
	交流促進			○	
	居場所提供	○		○	
	緩衝材	○			
	成長促進				○
	ちょっと相談				○
	情報提供支援型(ハブ空港)	○		○	
ニーズを第一線で汲みとる	寄り合い型			○	○
	情報提供支援型				○
	相談型				○
ともに成長する	多機能可変型	○	○	○	○
	成長促進型				○
構築する力を育てる	イベント企画				

表 3 ピア・サポートの役割機能

5. 考察

5. 1 北大版ピア・サポート活動と授業との関係

授業とピア・サポート活動の関係について、昨年度の報告書で筆者は以下のように述べた。

本授業は発展途上の「北大版ピア・サポート」を、調査を通して多方面の教職員に協力いただきながら、現実に触れながら利用者自らが検討し構想するという点に大きな特徴が

見いだせるのだろう。

ここから導き出される本授業の意味は、常に利用者の目線で、学生が目線で、当事者の目線で自己点検評価し成長し続けるピア・サポート活動を脇から支えるという点にあるのかもしれない。(松田 2011)

ピア・サポートと授業における取り組みをつなぐ発想には、初期研修としての位置づけとピア・サポーターが正課教育へ提案することで成立する授業の2方向があることを昨年度の報告では示したうえで、本授業は第3の方向として、上記の位置づけがあると述べたわけである。北大版ピア・サポートは、対象を限定せず、緩い役割規定の中で活動しているからこそ、「点検評価」としての位置づけで、ピア・サポート活動を照らし返す本授業の機能が活きるともいえるだろう。この方向を追求すべく、来年度のアイデアとしては、ピア・サポート室への期待や利用に関する質問紙調査を行うことも一案として上げられる。

幸いに、昨年度は本授業受講生から2名がピア・サポーターを希望し、現在活動している。今年度はさらに2名の内定が決定している。今後は、実際にピア・サポート活動に参加していくなかで、本授業を受講したピア・サポーターにとっての、本授業の位置づけについて、尋ね検証をしていくことも必要になってくるだろう。

さて一方で、広島大学、三重大学など他大学が行っている初期研修として位置づける授業がなくてもよいということではない。ピア・サポーターが月に一回開く会議においても、継続研修の必要性が話題に上がり、学内で開催した「びあのわ」報告会においても、他大学の研修・勉強会について鎗水が論点として上げ報告をしている(2012)。

事前初期研修については、来年度開講予定となっている「対人関係の科学」がその役割を果たしていくものとして期待をかけている。この授業は学生生活概論といった内容であり、前半を学生生活サバイバル編として、学内支援機関の紹介を行い、ゲストスピーカーとして現場の職員を招き講義をしてもらう。そして後半はスキル編としてストレスマネジメントを学ぶものとなっている。授業のコマの多くを保健センター講師に依るもので、ピア・サポーター初期研修としても位置づけることができる授業として期待される。

5. 2 変化しつつける「北大版ピア・サポート」へ

学生相談学会における2009年の報告では、国立大学で67.7%の大学がピア・サポートを導入しているとの調査結果がある(吉武 清實, 大島 啓利, 池田 忠義 ほか 2010)。また2010年に学生支援機構が行った全国1211校の大学・短大・高等専門学校を対象にした調査では、国立大学は57.1%がピア・サポートを導入しているとの結果がでており、平成17年、平成20年の前回調査と比較して徐々に増加していることが報告されている。この調査で示された支援内容は、表4にまとめら

【支援内容】(プログラム全体より)

支援内容	
学習サポート	48.1%
履修相談	32.5%
学生生活上の支援	50.2%
学生コミュニティー	34.6%
その他	20.0%

表4 支援内容(集計報告より抜粋 2011)

れていた。この調査のプロジェクトチーム報告では、いまだピア・サポートの現状として制度や中身について検討が不足しており、現場も模索中で、大学内における位置づけのあいまいさを課題として抱えていることが示されていた。また、学生の問題や悩みの軽減に特化した目的以外に、学生同士のコミュニティ形成がピア・サポートにおいて行われていることがまとめられていた（学生支援機構 2011）。

名古屋工業大学山下教授が呼びかけ人となって、東海中部地域の大学を中心に、ピア・サポーターの大学間交流を目的にしてはじまった「ぴあのわ」は、毎年その輪を確実に広げている。毎年 1 月上旬に開催されている「ぴあのわ」に参加し、2012 年 1 月の参加報告をまとめた鎗水（2012）は、その類型を対象の限定—非限定を縦軸に、活動内容の学習・企画—非学習・企画を横軸にして示し、参加 9 大学を 4 つに分類している（詳細は本報告書第 11 章参照）。

ここ数年の日本の大学における大きな動きとしてピア・サポートの導入が進み、かつ、その活動内容は多岐にわたり広がってきている状況であることがここから導かれる。

いずれも学生の強みを活かすという意味では共通した活動であり、見渡すところ意味づけかたとしては、教職員の業務の補完、日常的にある学生による学生支援活動を大学がバックアップするもの、学生の支援ニーズにこたえるもの、正課でも正課外でもない「第 3 のコミュニティ（土屋 2010）」としての教育機能、などが見出される。同時に、学生の強みを活かすという共通点に加えて、ただの学生身分ではない、という価値付与が大学組織から与えられていることも特徴であろう。

この、学生であって、ただの学生でない、さらにいいかえれば、当事者であって当事者ではない、このような矛盾をはらんだ、学生の延長線上にある立場の二重性はピア・サポートの大きな特徴であり、諸々の活動の原動力といえるのではないかと筆者は考える。

昨年度の報告書で筆者は、地域づくりに取り組む日置（2010）が自らを「場づくり師」と名乗り、「場づくり師」は「当事者になる」ことを追求すると述べていることを紹介した。このことの意味について、もう少し考えてみたい。

おそらく、ここでいう「当事者になる」というのは、当事者ではないし、当事者にはなりきれないことを前提にした言及として理解するとより本質に近づくのではないだろうか。当事者組織の中で展開するセルフヘルプの関係も同様である。ケアを受けるだけの当事者からの脱却が、セルフヘルプの出発点であることを考えると、それは、当事者でありながら、当事者ではない立場に身を置くことと言い換えられるだろう。ピア・サポート活動の原動力は、この当事者ではない自分と当事者である自分という二重化した立場の間の往復運動によってもたらされるといえるのかもしれない。一つの立場に身を置くことは、整然としたシステム化に寄与するであろうが、組織全体においては停滞のリスクをはらむものでもあるだろう。

「北大版ピア・サポート」の展開にかかわる担当教員としての姿勢は、今までと同様に、邪魔をせぬよう、枠にはめ込まぬよう、言葉が先行しすぎぬようにすることを、保ち続けたいと考えている。そして、先に指摘した立場の二重性に、サポーターが簡単な決着をつ

けぬよう触発する役割があるのかもしれない。

最後に、ピア・サポートの今後の発展にかかわり、重要と考える点について述べる。

学生支援機構の調査（2011）で示されたように、ピア・サポートが大学によって多種多様であることは、そもそも大学そのものが多種多様であることに起因する。大学によって組織もさまざま、地域・社会に果たす役割もさまざまである。つまりは、個々の大学のもつ特性と支援組織のアセスメントなくしては、ピア・サポートの効果的な展開はありえないだろう。

平（2012）はピア・サポート活動の柱として「かまモン化計画」なるものを立ち上げた。詳細は本報告書を参照していただきたいが、「かまモン化計画」とは「学生生活における可能性と多様性の提示」とある。これは、当事者である学生へのサービス内容を示す表現であるが、ピア・サポート活動そのものにも当てはまるのだと考える。

筆者は、ピア・サポート活動の可能性と多様性が、個々人の成長のみならず、社会関係資本（ソーシャルキャピタル）を活性化し、大学の支援組織を活性化するという仮説モデルを描いている（図 5）。そして、それはまたピア・サポート業務に変化をもたらすものでもあると考える。そのためにも支援組織のアセスメントを目的とした組織内調査が必要とされる。また、今後は、ピア・サポートの効果検証が求められていくであろう。本授業がここに寄与するものとして機能できればと考えている。

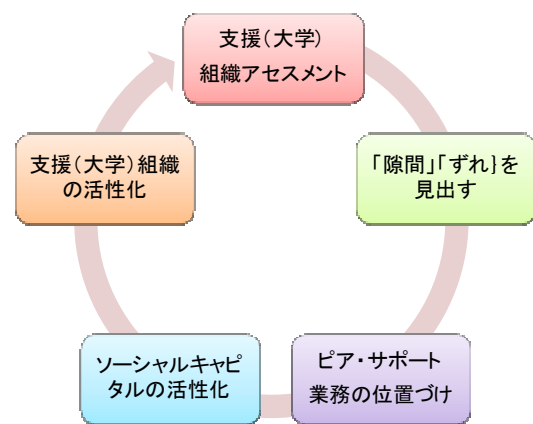


図 5 仮説モデル

【引用文献】

日置真世（2010） 社会実践による変革の力とそれを支える人間の可能性への信頼

北海道大学教育学研究院紀要 111 号 98－106

松田康子（2011）「北大版ピア・サポート」創生へのチャレンジを：全学教育フレッシュマンセミナー「学生支援におけるピア・サポートを考える」授業実践から 北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成 22 年度版） 北海道大学ピア・サポート活動報告書編集委員会 p97-110

日本学生支援機構（2011） 大学、短期大学、高等専門学校における学生支援取組状況に関する調査（平成 22 年度）集計報告（単純集計）

http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/documents/torikumi_chousa_part1.pdf

小貫有紀子（2011）「5.ピア・サポート ピア・サポートの現状と課題ーピア・サポートの拡大と多様化ー」大学等における学生支援取組状況調査研究プロジェクトチーム（日本学生支援機構）学生支援の現代的展開：平成 22 年度学生支援取組状況調査より：大

学等における学生支援取組状況調査研究プロジェクトチーム報告書 p.75

平 侑子（2012）本報告書第 5 章 p.61-69

土屋貴之（2010）ピア・サポートの可能性 大学と学生 第 87 号 29-35

鎗水孝太（2012）本報告書第 11 章 p.131-135

吉武 清實 大島 啓利 池田 忠義 ほか（2010）2009 年度学生相談機関に関する調査報告
学生相談研究 30(3) 226-271